丸雪小雪

泉鏡花作

風流翁

小日向臺町鼠坂の上に庵して、杉雪といひたる、亡き母の叔父なる人あり。其の母もあらず、父もみまかりたるに、代りて一片の赤心を陳べむとて、先生を乞ふこと切なりけり。

去年の夏のはじめ、われを率て行き給ひぬ。爾時、此庵や少し早いが風薫る

と興じて與へたまへり。われはたゞ、枸杞の新茶、煎餅の好なおぢいさんと甘えしのみ。老なる人のいかに嬉しかりけむ、相見る度、より／＼にいひ出でゝ、名家の風采を稱へしが、おなじ年の師走二十六日といふに年七十有三にしてみまかりぬ。

其硯箱の奥に「この庵」の句を更に手寫した

るに、

若葉にもれぬ杉の古垣

とわきをものせしがありて、あとにて見出されぬ。生前にはいはぎりし、あはれ師の名を知れるより、餘り差出でやせむと控へしなるべし。この事聞えしかば、よくつけられしよ、とのたまひぬ。さばかり嬉しかりけむも一ツはわれをいとほしめばなり。

いま杉雪の姪なる人、一人庵を守りて、あとを弔ひつゝ、

山里は手向けの水も薄氷

となむ、われは唯涙さしぐまる、斜汀悼んで曰く、

菊枯れて其後翁庵になし
音もなく雪に老樹のたふれけり

あへてこゝに句(く)の巧拙(こうせつ)を論(ろん)ぜむや。

言語

言語は謹むべしと、こゝに言ふまでもあらず、口説もやり過すと愚痴になるべし、知友あり、極めて謹嚴の人なり。嘗てなにがし氏を入れて室とし一女を擧ぐ。這へば立て、立てば歩めの頃と覺し、曰くいろ／＼厄介なものですが、三角形の口をあけて莞爾々々してるのを見ると、可愛いもんですと、蕪村が、鶯のなくや小さき口あけての趣ならむがい　われに於て何かあるべき。ガキなんざうるさいぢやありませんか、小鳥の方が餘程好いよと、其の人憤れる色ありき。年を經て、冬の日、僕曰く、今年は戌の年だつて馬鹿に一方々［はう／＼］に子が出來るよ、大根と一緒にあたり年ださうだと、知らざりき細君いはた帶してあらむとは。次に相見し時、細君臥床に横はれり。何うしたの、六月で流れたのだと、愁然たり、質ぢやアあるまいしといびしが、中惡くなりぬ。

のろけ箱

手紙が來たのが三錢、手紙を出すのが五錢、いゝ人が來ると十錢、此方から運ぶもおなじ、すべて逢ふ時は此の規定に從ふ、うつかり獨言をいふのは何に困らず引くるめて一錢、最低額にして、「アカンポが欲しいねえ」といふのが一番お安くないのなり、三十錢。世帶を持ちたいといふのが二十錢。其他岡惚が二錢で、むかしのいろが四錢、なほ考ふべし。これを箱に入れて養育院に寄附しようといふことさ。猪八戒が聞いて來た、等により額に差あるもの悟空、三藏といへども其のいはれを解せず。沙和尚の曰く、からのろけは皆でいくらかづゝ喜捨して之を慰むべし、寸法違で、のせられたるは、有金ひツさらつて剩錢を出さぬことにせむと、恰も此時、四衆金鐃に裝られて爲す所を知らず。

汽車

雲烟過眼、箱根も桶狭間も關ケ原も、硝子窓から駈拔けるやうながら、分秒にして長距離を行くことなれば須臾の間に趣變る、汽車の旅亦をかし。

嘗て上京の途なりき。家を出づる時は雨雲の氣勢もなかりしに、一夜辰の口といふ温泉ある山間の村に宿りしが、其夜中頃よりちら／＼と降出したり。朝は風さへ加はりぬ。名にし負ふ雪國のことなれば、一日に五尺三尺と積らむも計り難しと、白山颪におもてを向けて、勇を鼓して出發せしが、ハヤ行く／＼堆うなりて、腕車進まず、路わづかに七里にして大聖寺に泊る。あくる日は既に腕車通ぜず、徒歩して福井にいたり、こゝにて聞けば敦賀に達する山越の路鎖されたり。春日野の隧道損所あり、大艮のがけ崩れたりなどいひのゝしる。市中にても湯に行くさへまゝならずなりぬ。

籠ること三日半日、やうやく二日前の大阪の新聞此地に來るにあひて、覺束なくも路一筋敦賀に通ひ

たるをうらなひて立出でぬ。幸に別條なく、金ヶ崎に達すれば案外なり。恰も雪を排し得て、一番汽車發すといふ。あくる朝彼處を發すれば滿目皚々たり、柳ケ瀬、關ケ原あたりにては、雪、路傍の小家を埋む。

雪掻や蓑笠ｕｂｙ〉着たる大人數

いひつくすべくもあらず。實際は混雑修羅場の如くなりけり。賤ケ嶽のあたり見る目も凄まじかりしに、其日午に至らず、長濱附近に來れば、白きものわづかに藪垣の間にかゝりて、桑も畝も皆黒し。これはといふ間に停車場に入る、長濱は霙降れり。米原は寒烈しくして、たゞ天の曇れるのみ。いともをかしきは、岐阜、大垣に着けば、比較的天日赫々〳〵とやいはむ、一點の雲もなかりしならずや。而して列車の屋根よりは雪のとけて落つる雫雨の如くなり。行違ふ汽車の旅客皆奇異の思をしつべし。小春日の野の一方に三十里遠き國のツイ今しがた降れる雪を汽車其處に被ぎてあるなり。師走十六日。

深々と雪を被げり終列車

汽車行くこと十里にして春の雪まばら

焼豆腐

長屋に夫婦喧嘩あり、かみさんなぐられて泣く。鄰家のもの行きてこれを慰め、其いはれを問へば、事もなき次第なり。シケにて肴はなし、野菜の新らしきもあらず、主人が好めるまゝ、毎日々々、焼豆腐ばかり煮て膳に上せしに、七日、八八日、十有餘日、知らず顔に意地の悪い、默つてこれを食ひしが、二十日めの日曜に突然鬱憤を洩せるなり、「何處まで押を強く食はせやあがる、故と默つて見て居たのだ、モウ堪らない。」と云々。之を牛込の先生に告ぐ、先生「主人は勤人かい」答へて曰く「ハイ」「これあるかな、左様な細君は宜しくなぐるべし、旦那のお菜に忠ならざる細君は買食をするのだ。」と世の細君等、豈此言を味はずして可ならんや。

景気

「旦那御都合まで、」　「大塚まで幾錢。」　牛込の揚場から二貫五百だといふ、最も大降にて眞暗なりし、夜は十二時過ぎなり、　「十八錢ならば、」

「フム」　といつて應ずるものなし。

どん／／橋を向うに見て、困つて歩行く、暫くすると背後から腕車を曳いて追懸け來れり、　「私が參ります、召しまし。」　やがて膝かけを以て裙を蔽ひくれたる折から、二人ばかり威勢よく帳場より駈附けつゝ、　「止せ止せ、ソンな處へ、」　「いくらも仕事があらあヤイ」　「景氣に觸るぜ、べらぼうめ。」

「だツてもう何だ、」　「えゝ、斷ツちまひねえ、親方がさういつた。」

「旦那、申譯がございません、北廓ならたゞでも參るんですが。」

と、恐入つた。

妄信

くろもじ噛み／＼紅で書く、こがるゝアの字あり。小指を喰切つて鳥居に名を書す本間なにがしあり。我が友は或時てんぷら屋の二階にて杉箸に醤油をつけ、塗盆に數字を書して、會計の恥あらしめざりき、時と場合に因るのみ、意志に於て輕重ある事なしと我は信ず。

【完】